



岐 蘇 林 多

- 森林と魚類
- 命の洗濯
- 駒場より
- 私の一週間
- 幼少時代遊戯日記の一節
- 弓術部大会の記
- 霜枯
- 通信
- 夏殖戦記
- 記念事業贈金申込報告
- 創立二十周年記念會報告
- 林友代領収報告
- 編輯より申上候

大正十年十二月廿五日 第四百六十六號 每五廿月日行 第三種郵便物認可 (明治四十四年六月十四日)

森林と魚類

菊池 生

森林に囲まれた湖水には浮游生物が豊富で割合に魚類も多いと言ふ事は森林と魚類との間には何かしら密接な關係がなくてはならぬと思ふ。木に依つて魚を求むるは印度産の攀木魚位の者でこの魚は罾室に水を納れて水中を出で木幹に攀ち登る奴だ。それ以外に直接には森林が魚類に影響あるとは思はれない。

扱て魚類の住家は水である。従つて水質の如何を考へねばならぬ。森林は川や海に一定量の水量を供給する。魚族は此に依つて生活の安定を得る事になる。急激なる水量の増減、水温の高低、流勢の強弱の變化は魚類に取りては由々しい大問題である。水の淀た所には鮒、鯉、鰯等が住み瀨の荒い所には鱒や鮭、タナピラ等が居る。木曾川の上流は水が冷たいが茲には岩魚、サスリ等が繁殖して下流に行くに従つて数が少なくなるのは誰も知つて居る事である。

十月上旬タナピラの産卵が始まつた時學校の下の松島のセギで觀察した所によると最初は雨の後で水量が多かつた爲に割に岸に近い方で産卵して居たが次第に減水し岸から遠い方で産卵する事になつた。此事を極端に考へると一旦大水に逢ふと折角産み附けた卵が押し流される事にもならうし又は泥砂に埋もれて孵化する事が出来なくなるとであらう。若し天氣が幾日も續いて甚だ

しく減水したら潮干上つて死滅する事にもなるであらう。

大洪水大早魃の際に於ける魚類生活の困難は想像も及ばぬ者があらう。此等の問題は河、湖、海と別けて考へた方がよいのだけれど茲では單に木曾だけで考へて見る事にせう。次に魚類の食物だが川虫や石垢、その他水棲の生物等、偶には川に落下して行く昆虫や種々の物であるが森林があれば森林から若干の食物が恵まれる事になるだらう諸君何物を與へられると思ひますか。

魚類だつて休みをして隠れる所がなくてはならぬ、何時も柳の下に鱒が居らぬと云ふ諺は此邊の消息を物語るもの、魚は好んで木の影に群集する。

造林と伐木とは林業上の二大作業だが今大森林が伐られたとすると、鳥獸は棲家を失ひ、昆虫は食物を乞ふる事さへ出来なくなるであらう、そして其近くを流れてる川の如きは少なからぬ打撃を受けずにはすまされぬ、伐木した後數年間の山は見るから荒寥悲惨の態で風雨の度毎に泥砂が流れ込む川底も變化するであらう。近所の黒川に就て漁師の物語る事を聞いてもよくわかる。そこに住んで居る魚族こそんだ災難で木の影がなくなる。餌となるべき生物は移動する又は死滅するから食物も缺乏する。

昨今問題となりつゝある、森林鐵道の爲めの工事、電力會社の作業が如何に河川を荒廢せしむるかは諸君の承知せらるゝ通りだ

友 林 蘇 岐

が魚族の爲めに一箇の涙を賜はる仁者は果して幾人あるでせうか。
 鮎の如きは以前は上松邊までも上つて来たさうだが工事が始まつてからは殆ど木曾川には見られなくなつた。鮎は水に對しては鋭敏な魚である。
 要するに我が國は海國である。そして森林が割合に多い。大河と云ふ程の物は無くとも小川は無数にある、森林の荒廢は海灣にも重大なる意味を持つてゐる、引いては海魚の盛衰に關係を及ぼす、諸君の一考を煩はず次第であります

命の洗濯 秋本淳一

(一) 盆 休 み
 今年の盆休みはどうして暮さう。たつた二日しかない休を、最も有効に送るにはどうしたらよからうと、今年の正月が過ぎると同僚の敬君ともうこんな事を相談し合つた十和田湖に行かうか――
 男鹿半島の島巡りをやらか――
 田澤湖見物に行かうか――
 それとも松島まで奮發しやうか――
 大鰐か、淺虫の温泉で、命の洗濯をしやうかそれにしては二人は余りに貧乏だ。といつて家の中にゴロ／＼して居るのはなほイヤだ、考へ／＼た末に店の自轉車を引張り出して、こゝから海岸に添ふて青森縣に入り、五所河原から弘前に出て歸らう、往復六十里、自轉車なら一泊で、大丈夫歸つて

來られる、海岸には随分景色のいい、處もあるさうだから面白い旅が出来やう、さうだ、二人は盆休みの到來を待つた。
 盆休みの二日を、主人の視界から遠ざかりすべての束縛から離れて丁度籠から放たれた小鳥のやうに、自由に、氣ま、に遊び廻る、何と愉快の車でせう、何と面白事だ、思ひきり命の洗濯を仕様、腹の底の底までも、旅の空氣にサラゲ出して生業の苦勞を忘れやう。
 盆と正月――それは俺達にとつて、最も尊い時期だ、平素はロク／＼休めもせず、セツセと立働いて、その二期の儲かの休みにホト息をつくのだから、此の二期の休みが、あつて初めて俺達の活動が續く。やがてその盆休みが來た。
 (二) 椿 鑛 山
 女中が、氣をかけたのか、平素の太食を知つてか、又は旅費の少ない處を察してか、兎に角大きな握り飯をこしらへてくれた有り難くそれを腰にぶら下げて、家を出る。アツラへ向きの、天氣だ。
 青田をかすめて來る、ツヨ風に、格別の暑さも感せず、八森村まで、來た。能代より五里――椿鑛山(又は八盛鑛山)の精練場のある椿臺に上る。
 日本海の浪が、椿臺の脚をヒタ／＼と洗つて居る、入海を隔て、男鹿の半島が、薄い墨繪の様に見える。
 春の海隔て、夢の男鹿の山

寺がある、俺達は先ずそこへ車を捨てた、「殿閣堂美なり」と陸奥案内には書いてあるが、山間から本閣まで、僅か十數歩、狭い地區に窮屈に造られた建物だ、つた。それで、も杉の大木が、幾本もあつて涼しい日蔭を作つてゐた。ジ、イ、イ、といふ油蟬の騒しい聲を聞きながら、俺達は下女の心づ、くしの大きな握飯を平げ、た喉が、渴いたので、お茶を請ふと厨の方へ行つて案内を請ふて見たが、誰も出て來ない、スダ、越しによ、見へると、中に中年の女が、晝寝をしてゐた、が、なかに起さそうもないので、ソツ／＼裏に廻つて井戸の水を引き上げて呑んだ。狭い町に陽光が、カン／＼と照りつけてゐた。

今年の春こゝに居る友達から端書きの端、こんな句を書いて寄こした事を思ひ出す、此の鑛山は、一時頗る盛大にやつて、りつばな精練場まで、出來、能代港の停車場まで、五里の間に、鐵索を架設したりしたが、銅の産出が、思はずなかつたりして、休山してから、かれこれ五、六、年になる、櫻鑛場や、精練場の大きな建物も、太い高い煙突も、空しく風雨にさらされて居る、電車の軌條も錆付た、鐵索も動かさない、工場長屋は廢れたま、だ、一時榮えた商店も寂れ行くらしい、真に一瞬、自轉車で、過ぎ、たのみで、も何となし涙ぐ、ましい感じがする、俺は曾て、佐久の追分の古驛を過ぎ、北陸街道と仲仙道との追分の辻に立つて暮れ易い、秋の夕日をあびながら、此番の油屋の繁榮を極めた、徳川三百年の昔を忍んだ、事があつたが、今又こうして、年毎に寂れ行く鑛山町を見るにつけ、あの追分の古驛を思ひ出し、田山光袋氏の「古驛」といふ紀行文を思ひ出す。
 小學校の地理の教科書や、大日本國民中學會の講義録などには、此鑛山は今も盛んにやつてゐるやうに書いてある、けれども事實は今書いたやうな有様だ。
 能代から此番に來る五里の間は、ロク／＼海も見なかつたが、此鑛山町を通り過ぎてからは、絶えず、海を左手に見て進むやがて岩館村に入る、能代より七里――小學校の前に行く、「岩館簡易圖書館」と

友 林 蘇 岐

いふ大きな立札がある、何で、も改造を尊ぶ、世の中だ、何で、も簡易を尊ぶ、世の中だ、「簡易圖書館」の内容は、どんなものか知らないが、名前だけ、時代によさわしい、否、田舎には新らし過ぎ、た看板だ。
 岩館の部落を過ぎ、もう秋田と青森の國境近くなる。
 去年の秋來た時は、ヌ、キの白い穂が、波打ち際から、思ひきつて迫つた山脚一帯に咲き亂れて、居たり、秋未だ、浅いのに、難木材の葉が、ヌツカリ振落されてゐた、して、ヒド、夕原始的の臭ひが、漂つてゐたのに、今來て見ると、虫が、喰つた様に山腹至る、處草が、刈り取られてゐたり、難木材の近處に炭焼籠が、出來たりして、折角のカラーも臺なしに、ブ、チ破されてゐるのには、限りない失望を感じた。
 然し、自然の破壊は、やがてこれのみで、あるまい、五能鐵道(秋田縣能代港より青森縣五處河原に通ずる八十餘哩)が開通するやうになれば、痕形もな、破壊しつくされるで、あらう。
 こゝを過ぎ、れば、もう陸奥の國だ
 (三) 深 浦 の 町
 能代港より十四里、弘前より十八里の海岸とある入江に沿ふた淋しい町である。
 黒崎の部落から、上下一里半位の峠(むしろ坂道)を越して直ぐ、町に入る、町の入口の左に、此の邊で、チト名の知れた圓覺

寺がある、俺達は先ずそこへ車を捨てた、「殿閣堂美なり」と陸奥案内には書いてあるが、山間から本閣まで、僅か十數歩、狭い地區に窮屈に造られた建物だ、つた。それで、も杉の大木が、幾本もあつて涼しい日蔭を作つてゐた。ジ、イ、イ、といふ油蟬の騒しい聲を聞きながら、俺達は下女の心づ、くしの大きな握飯を平げ、た喉が、渴いたので、お茶を請ふと厨の方へ行つて案内を請ふて見たが、誰も出て來ない、スダ、越しによ、見へると、中に中年の女が、晝寝をしてゐた、が、なかに起さそうもないので、ソツ／＼裏に廻つて井戸の水を引き上げて呑んだ。狭い町に陽光が、カン／＼と照りつけてゐた。
 此の町を出てからも相變らず、海に沿ふて走る一高一低、平坦な道は殆んど、ない、加ふるに午后から向ひ風になつて車の重い事夥しい。
 (四) 鑛 ヶ 澤
 大戸瀨村の大戸瀨に來た頃、前方に岩木山が見へ初めた、右の麓は山にかくれて、わかないが、左は裾野になつて、平野に連つてゐるやうに見える、陸奥の富士と云はれてゐるやうに、成る程形は整ふてゐる雲が、二節三節八分目の處にからまつてゐる、この山の裾を半周すれば、弘前だ。風になやまされつ、鑛ヶ澤に着いたが、五時半、夏の日にしては未だ、暮れそうに

ない、もう三里や四里走れる、時間はあるとしても、体が、疲れた、這乗りには慣れない二人は、もうすつかり疲れ果てた、明日の行程を氣づ、かはない譯けで、もなかつた、此の疲勞に、此の向ひ風で、は再び、此番を立つ勇氣が、なかつた、町の中央の竹内旅館に入る、二階の室に通される、二人は物も云はず、に、崩れるやうに横になつた。
 此の夜は、い、月の夜でした、二人は夕食後、疲れた足を町に運んだ、町は片側町になつて海にのぞみ、海から吹いて來る風を、まともに受けて、夏とも思れない涼しさで、湯衣一枚では、肌を粟を生ずる位でした。着夏の中なのにもう商の店を閉ぢて、繪ハガキを買ふとしたけれど、果せなかつた。盆踊がど聞いたが疲れた足には、踊のある場所まで行き果せなかつた、宿に歸ると蚊帳が吊られてあつた
 鑛ヶ澤町は西津輕郡の石邑、郡役所、警察署、區裁判所、小林區署などがある、これより五所河原まで五里、弘前まで九里、共に自動車を通つてゐる
 (五) 弘 前
 翌日は相變らずの向ひ風で徒らに疲れるばかりであつた、それに連日の天氣續きで道路の砂埃が立つので、風が吹いて來ると砂煙を吹き上げ、目も口も開いておられない有様で、鑛ヶ澤から森田に至る三里の道に二時間を費して仕舞つた、之ではとても

豫定の道程を踏み走る事は不可能だ。何でもかでも明日の仕事に差し支えないやうに歸らねばならぬ。豫定を變へて五所河原に行かず鶴田に出て流車で弘前に行き、弘前の公園でも見て、又流車で能代まで歸へる事にした。

鶴田驛から流車、林檎畑の中を走つて約一時間、藤崎驛に下車。これから自轉車を走らして小二里の道を弘前の公園に行く。公園は、舊津輕藩の城址、現に牙城を存す。二の丸、三の丸は、八師團司令部あり他は公開して公園となす。園内樹木多く、岩木山西北に眺み四方の眺望亦頗る佳。

やがて此處を辭し、停車場に来て見れば、能代線に連絡する上り直行の發車までは、一時間半もある。次の驛まで行かうと驛前に氷など食つて、市街を眞一文字に突き切つて歩兵、騎兵、砲兵などの聯隊前を通り石の多い田舎の近道を走つて石川驛に来て見ると未だ時間がある。これならもう一つ次の停車場まで。又二人は休む間もなく、今度は國道筋を追ひ風に送られながら一里半大鵬驛に到着、未だ三十分ある。こゝに来てこの温泉に入つて見ないのも話にならない鳥の行水のやうでもい、發車までに温泉に入つて来やうと、驛近くの湯に走つて、着物取るのもどかしく、ザブンと湯槽に飛び込めば、昨日から半シャツ一枚で災天の下を走つてゐたので腕や頸や脊中の皮膚が日に焼けてゐて、ピリピリと湯の

しみ込むを痛いといふ間もなく、湯から飛び上つて、停車場に馳せつけければ、もう流車が着いてゐる人を押し分けて切符を買つて改札口へ出れば自轉車、あるから、もう間に合はないといふ。此の流車に乗りはぐれ、ば、今日の中に能代に歸れない。改札係の驛員と二三つ押し問答してゐる間に、ビリビリと笛が鳴つて流車が動き出した。萬事休矣。僅かの快をひさばるために、んだ目に會つて仕舞つた。

「お氣の毒ですね。」
驛前の賣店に居る若い女が同情してくれた。こゝに長くゐても無駄の事、買った切符を突返して、又自轉車に疲れた体をつくして上り坂の多い道を破ヶ關まで急いだ。長い夏の日も暮れて此處の温泉町に入つた頃はもう人顔も辨へない位の時刻になつてゐた。腹も空いて来た。栗田といふ温泉宿に上つて夕食を命じ、今度は流車に遅れる心配もなしゆつくり温泉に浸つた。

機械驛に翌朝の三時に着く流車がある、能代線に連絡しなくとも、機械からなら僅か一里だ。まして自轉車があるから夜明け前には歸る事が出来るその流車は、こゝを夜の十二時に立つ。それまで待つのも心もどない。ま、よ走れるだけ走れ、その流車の追ひつゝまで白澤驛か、大館驛か、最後の奮闘を仕様と俺達は又こゝを立つた。陰曆十六日の月は、皎々として行く手を照す矢立峠の杉林は、黒々として聲がない。

カラ／＼といふ溪流の音を左手に聞きながら俺達は此の矢立峠を越して秋田縣に入らうとする(終り)

附言 命の洗濯を仕様とした此の旅も徒らに疲勞に終つた。こゝぞと云つて取り立て、見た處もない、然し走馬燈のやうに走る自轉車旅行でも身心に及ばす効果を忘れたくない。私はこれから暇ある毎に歩き廻らうと思ふ。

駒場より (續)

S F 生

我が駒場の運動會は一高の記念祭と並んで市の年中行事の一と數へられて居る人氣のあることは全く驚く老若男女が朝早くから押しかけて行く流石廣いグラウンドも忽ち立錫の餘地がなくなる。

四、駒場の運動會
駒場の運動會が昔からこんな人氣のある原因は詳かでないが運動會當日の餘興とも言ふべき飾り物であらうと思ふ毎年各級が競つて作りあげるものであるをうして奇抜な而も奥ゆかしい物が所々に飾られて萬人をアツと言はしめるのだこれを見んとして衆人は集るのである。

五、研究指導

研究指導と言つても現在に於ては完全なる組織があつてやるのではない各自が特に究めんとする科目を其擔任教授について指導を仰ぐのである而して各自研究の結果や又意見などを言つて先生から批評を受けるのである。

それ故に三年生は一月から卒業まで他に於て實地研究をし之を卒業論文とするのである。これが又非常によい結果を生んで居る。

六、専科入學

稱號の欲しい人は卒業後専科に入學して本科生と共に研究するのだ。さうして其在學中に高等學校卒業檢定を受けて本科生となるのである。森林化學で名高い三浦博士は實科から専科に入つて進んだ人である。

専科入學には試験のある事は勿論だ。然しさう大したものでもないらしいが本科に缺員がなければ入れぬから悲觀する現在僅か一人しか入學して居ない大抵の人は京大の經濟學部に學ぶ様だ。近年これが非常に増加した。これには無試験の恩點がある。

七、實科の入學試験

受験せんとする人の爲に餘白を利用して書いて見よう。
我が實科の入學試験には餘り難問はない。よらだ平易を主として居る。高農殊に盛岡の様に到底解し得ぬ様なものはない。今後はどうかしらぬが今まではない。最も困難を感じるものは化學である。年々受験者がこぼすものである。

英語や數字は中學教科書をやつてほしい。大抵其中から出て居る近年英文は社會問題の出る傾向があるから附言しておく。

次に注意してほしいのは作文だ。作文と言ふと誰しも軽く見易いものだが實科には國文漢文の試験なき爲特に作文を重視する作文で漢文國文及び方法の力を見るのであるから注意して欲しい。

八、卒業生の評判

卒業生の評判については諸兄は常に聞いて居る事であらう。或は善く、或は悪く……

僕は次の様な事をきいた。
「高農出は型にはまつた様に執務して別に應用とか改良とかの智に乏しい様だが實科の生徒は卒業當座一年位は高農出よりも役に立たん、けれども少し仕事に慣れてくると融通がきいて事が面白く進捗し一事を委ねることが出来るからよい。」

九、入學してから

入學當時は唯嬉しいばかりで何もせず。日を過してしまふ講義も苦しい事はない。専門科目の如きは山林校時代と同じ様な事を講義せらるゝので馬鹿馬鹿しいと言ふ様な感じが起るけれども此處は夢である。當座の事である講義が次第に細になるにつれ苦しくもあり面白くもある。林業界のオソツクタイが自説を論ずるのだから興味がある。又有難い譯だ。我が實科の誇も此處にあると思

ふ而して自由放任主義である爲一見秩序なき様である生徒は呑氣に己が進まんとする道に向つて居る。何事も大學制度であるから自由なものだ。ソノソノ主義の勉強とは自ら異つて居る。故生徒は好む所に向つて研究し勉強して居る。

一〇、駒場スピリット

駒場同人の中には駒場スピリットが流れて居る先輩から傳へ傳へて渴しもしない駒場精神の流れのやんだ時は駒場の生命の終りである。

我が駒場同人には不知不識の間に此精神が流れて居る。然し眞に此の精神の何たるを知るのには眞に駒場生活に入つた時である。覺りの遅い眞に駒場生活を味はなかつたものは卒業する迄も駒場スピリットの何たるを解せず卒業して初めて知ると言ふはさうだ。駒場精神の眞隨は言葉や文章を以てしては到底言ひ表はせない各自が直接に體驗して味つて見なければならぬ。

毎年四月新入生歡迎會の席上等でよく先輩が此精神に就いて話して呉れる。然し之は全體の一部であつて眞の完全駒場精神を解するは即ち眞の駒場生活に入つた時である。

廣々とした武藏野の一隅にある白壁の一塊は蒼々たる林の中に双手を擧げて來らんとするものを待つて居る。來れ諸兄よ……來れ駒場へ…… (完)

私の一週間

鹿高農 和田生

廿六日 月曜 晴
六時半起床獨語練習六日に渡る野球大會の最優戦大林署對教師團が昨日鴨池グラウンドで開かれたので野球狂の△に引かれて終日立ちん膝強い濱風に吹かれた勢か馬鹿にビシタ(頭)がいたい鼻がつまる腹がなる

第一限 獨逸文法 谷山講師
巨大な體軀が教壇に現はれる胸のダイヤ光燃然勿も聲ありアウフザイアツツワイウンノインナツヒ(九二頁開け)
講義約半にして和文獨釋一名毎に指名暗誦各自はリヒツツヒ(正し)か或はニヒトツト(不良)の下にエンマ帳に止められる。かくて數名暗誦の後ダンワイアル(次へ)の聲によつて次第に進む。――鐘がなる先生は所謂流暢――先生は一時間に數回流暢を繰返へされるヂースワンデイストアツツの聲と共に場を去られる。

第三限 獨逸讀本 谷山講師

所頭の集合が難澁の爲か甘く譯せない、幸ひ譯讀の本命はEとKとに負はされる、随分妙解奇譯も出たが程なくヂースツレディストアツフ。
第四限 森林數學 万年教授
不斷六七頁も書かねばならぬ所を今日はタツタ四頁十望高による材積計算の處だつた中食――第五限の植物病理は川越教授上京不在の爲休講二時迄痛頭をいたはる。

第一限 獨逸文法 谷山講師
地被(Geographie)の講義は長くして短い此の二時間緩くて早い先生獨特の教授振りの裡に終はつた
第二限 獨逸文法 谷山講師
アウフザイテから、スツンテイストアツフ迄少しの洗滌もなく所謂流暢な真面目な講義を續けられた。尤も其の間には先生の長

在獨中の經驗談や在鹿兒島獨人との面白い失敗談もあつた。

第三限 利用 西講師
木材組織と割裂性との關係について先生獨特の熱心な講義があつた、――柿板(コケライタ)(キイタ)と讀んで笑はれた人があるとか御タメライノ
第四限 獨逸讀本 谷山講師
二十四課より
先づ白羽の矢はYMYに立つ、アルツァイト(ZeeA)をアルザイツ(La'sies)とでも思つたのか各々の側に等と出鱈めいつたりフオルネー(emhentoV)を前にさる等と妙譯して笑聲は場に絶へなかつた。

第五限 物理實驗 伊豆教授
曲率半徑測定の實驗。中食後直ちに着手一時半終へる、新聞及雜誌民勞を見る、入浴食事、散歩途中フシントン會議日本全權の顔振りを見る、ノート整理十一時半床につく。
二十八日 水曜 晴れ
起床の喇叭か澄ましておされれば何の食事の喇叭だ、手紙書きかけで登校
第一限 法律 横山教授
民法物權の所一時間中命がけの大車輪早い
第二限 土木 野口助教
法尻法頭の定め方の講義不徹底ながらも多

の實習(當にして我慢す)
第三限 物理 伊豆教授
一學期中に終つた氣象の試験次の四問だつた

- 一、氣温降下ノ原因ヲ列記セヨ
二、低氣壓區域内ニテハ一般ニ天氣不良ナル理由
三、夏ト冬トニ於ケル我が國附近ノ氣壓ノ狀況ヲ記セ

第四限 測量 西講師
中食父より送金、同時に妹より小包と手紙(それには脚氣だの氣管支カタルだのと病名が五つ許り並べ而し達者で通學してぬますと書いてあつた)が着く

第五限 獨逸文典 谷山講師
所謂流暢な先生の聲は隈なく場内に溢れる九十九頁まで
第六限 以降土木實習(都合により中止飯舎人浴父への葉書及妹への感謝兼皮肉の手紙(七枚)認む新聞閱覽シャツ洗濯夕食後日と鴨池に散歩す波荒く興湧かず日曜に乘馬すべく約して飯舎ノート整理

(Farm Forestry)を見る十時半就床
せめて一週間はと思ふて書き出した自分の日誌、授業日誌とでもいはいはうか――もう此れ以上續ける氣にはなれない、全く書くに忍びないのだ、何故つてよし自分こそ形式上極めて變化の少ない味氣なさうな此一日(の中にも尙事實上緩いとはいへ滞りな

く次へ)と開展しつ、ある或何物かを見出す事が出来得るとしても他人目には果して是が適確に(よい言葉だ)認める事が出来るかどうかは頗るあやしいから。――でも此以上三日も四日も書く事は只徒に尊い紙面を汚し假名使のミスと共に多々益々恥入る次第であるから残る四日は只時間割に止める事にしよう。

- 二十九日 木曜 晴れ
森數、物理、利用、林製、英語、數學、實習
在東京のKより來信
三十日 金曜 晴れ
土木、造林、法律、行政、物理、森數、造林、實習

十月一日 土曜 日
狩獵、植病、林製、体操。
叔父永眠の悲報に胸をさる
二日日曜 晴後雨
先日(二十八日)の約に従ひ降雨をあやしみつ、日と鴨池に馬乗りに行く、邦馬は皆貸付けられ朝鮮馬數頭残るのみ自分は尙不馴れの爲鮮馬の小を可とし大に耳唆かしたが耳頭として賛成しない曰く「君僕をガンダレ(馬鹿)にしちよつね」と依つて其意を質せば曰く「朝鮮馬ナ(は)がツツイ(全く)走らんでオーダイカ(誰か)引張るフト(人)が費るとヤンデ(入るから)宜なる哉耳の言!自分分は上級の耳を不知識の裡に馬當としたのであつた抱倒高美幾數分雲間を漏れる水玉一個又一個忽ち降玉萬斛已むなく軒下に

今週中の献立
小やみを待つて歸合
速水氏論理學の間接推理の處四十二頁通讀す夕餉早々日來る曰く「コンニヤ(今夜)中座に慈善琵琶會ノ(ガ)ゴハンデ(あるから)君イカンナ(行かないか)」と
朝の失望と終日の降雨にイラ立つた自分のコンセンスは何を考へる餘地も持たない頭れぬ鹿兒島辯は即座に「チヨイ(一寸)オマチ、ヤツタモンセ(待つて下さい) イツキ(直ぐ)キモンデナー(直ぐ来るから)」と言ふた

Table with 3 columns: 朝食, 中食, 夕食. Rows list various food items like 味噌汁, 牛肉, 天ぷら, etc.

幼少時代 惡戯日記の一節

「おい勝つわん、こ、へ火を付けて良いかへ今家の勝手からマッチを見付けて来たから」「いけない此處は舞臺と言つて大勢の人が集まつて芝居や活動寫真など色々見る所で、今こ、を焼いてしまふと芝居が見ら

木 靈 佳 人

友林蘇岐

れなくなる計りか、そうして又お前の家は直この前だらうから、火が移ると家迄焼けてしまふよあぶないからマツチを寄こせ!!

直に赤門へ連れられて行く所だつたが、もマツチを持つて遊そんじやいかんぞ

弓術大會の記

佐藤峰月

大正十年度弓術大會を霜月六日に催した生徒の中にても例年より参加者も多く他に岡部、西澤、中村、菊池、塚越、小貫、藏尾の諸先生又福島町の老勝喜樂も参加せられ非常に盛會であつた。

Table with 2 columns: Rank (e.g., 一等, 二等) and Name (e.g., 藤尾 先生, 佐藤 鎮守). Includes a list of winners and their scores.

安井老人感謝の歌

紅葉はのまだ浅けれど学び舎の深き恵に我は染まりぬ。

通信

廿周年記念式の際校友會より感謝状を呈せし諸先生より禮狀に接す次に

今般木會山林學校創立廿周年祝賀に際し御丁重なる感謝状を賜はり實に有難く存奉候省れば五ヶ年六ヶ月の短か、らざる歳月の間御縁ありしも何等の寸効無く却つて各位の御庇護により大過無く經しに過ぎざりしに却つて斯く感謝状を戴き汗顔の至りに御座候も家寶と致し永く紀念仕る可き所存にて御座候先づは不取御禮迄斯くの如きに御座候

大正十年十一月 大場 慎六

拜啓 秋冷の候校友會各位には益々御勇健御奮勵の段慶賀の至りに存候

陳者本年は貴校創立二十周年に當り去る十月十六日を以て記念祝賀會を御開催被

友林蘇岐

二十等 十点 (二年) 中村 幸
二十一等 五点 小貫 先生
二十二等 五点 (二年) 遠山 重明

霜 枯 槇の舎

○かやす、き折れてくだけて地にしきて霜のみ白し高原の路。
○秋の空夕日赤らひあはれさに今日の仕事を つぶやきさる。

○森深し常盤樹ながら下敷のわづかそちこち秋を色どる。
○高原の谷間をたきも行く水を扱めば嬉しや喉にひびきて。

○雲出てぬ黙してかざる雲出でぬ片割月の霜に文どり。
○御料林もみのしげみに鳴き合へる小鳥の聲の奥のゆかし。

爲候由遙かに御祝ひ申上候其節は特に御案内に預り今回又丁重なる感謝状並に記念牌御惠送被下候段誠に恐縮の至り謹んで御禮申上候

兼て會報記念號御發刊の由にて何か記事を送る様にどの御手紙を戴き小生も是非臺灣事情の一端を通知し 事種々に誤解せられ居る臺灣の實際を御知らせ致し度く存じ居り候處今春來事業上の調査計畫のため寸暇を得ず殊に八月末より事業地へ出張致し居り祝賀日にも祝電さへ差上る機會なく誠に失禮致し候

錦地は目下紅葉の眞盛り野も山も百千の色彩にて盛装し名物のツグメに舌鼓を打つ頃かと被存候當地は今尙日中は八十度内外にて過半は夏服を着し居り候へ共小生の擔任せる事業地は新高山の西北約七八里の地にて海拔一千二百尺より一萬餘尺に及び高峯に登れば昨日既に薄氷を見ることがさへ有之夜間は焚火にて漸く寒さを凌ぐ程に候幸に渡臺以來頑健にて數回一萬尺の高峯を踏破し生蕃相手に活動致し居り候

右午延御禮旁如斯に御座候 敬具 十一月六日 北村 正夫

校友會御中 謹啓 時下嚴寒の候益御清勝奉賀候陳れば先般貴校創立二十周年祝賀式舉行せらるゝに

方り特に感謝状を賜はる誠に光榮の至りに存候小生曩に貴校職員の末席を辱ふし何等貢獻するところなかりしに反つて此の光榮を負ふかへりみて洵に慚愧なるものにて候小生今や遠く東北の地にあるも教育界の一員として益斯業に奮勵以て此の誠意の萬一に報ひ奉らむことを期し居候先は右取敢へず御禮迄尙貴校及貴會の益隆盛ならむことを祈り候 敬具 大正十年十一月廿日 在秋田 島内 庸明

山林學校々友會 御 中 此の外諸先生より同様禮狀に接す

寄宿舎から

九 十一月迄三ヶ月の平静な俄然月の改まると共に實に悲むべき事に依つて破られた一日濱尙吾君三日柳澤求一君と僅かに二十四時間を隔て、望み多き學友の靈魂は去つて天國に飛び父母兄弟並に我々の血涙を搾らせしめたのであります 現實の死をまのあたりに見せつけられた我々の驚き嘆きはどれ程でありませう死の悲惨を耳にもし口にもして居たもの、かほごまで鮮明に唐突に展開され様とは誰が豫期しませう口に上さうとし筆に走らせ様としても感慨胸に逼つて表現する事が出来ません 柳澤君は諏訪の人でございます入學以來

三ヶ年間病氣外泊の一ヶ月を除いて始終忠實従順な舍生として自分を盡され今年は第七室(前期中)第一室(後期)に長として友に教く下に好く其の口を衝いて出る一語一句は警語となり奇句となつて乾燥しきつた舍内の空氣に多大の濕ひを與へましたしかも今は夫が悲しい追憶の種となつてしまつたのであります

濱君は東筑摩の人でございます今年四月入學と共に舍の人となられ沈黙寡言躬を以て行ふとも言ふべき性格の持主でございます

濱君は三日柳澤君は三日各告別式執行の上遺骸をその郷里に送りました同級の人舎の人は悉く棺側に待して亡き兩者への最後の友情を捧げました葬儀には學校としても舍としてもクラネとしても夫々代表者を參列致させ吊文造花香奠を手向けました

其の後の舎は漸次平静になつてまいつた様に思へますが而してこの二友人の死が何物をももたらさない筈はございませぬ死の現實が心理に及ぼした變化は些少なものはありますまいけれど我々の殆んどは之を口にするのを恐れて居りますそして話題の悉くは臨時試験と冬樹休暇の楽しみに向けられて夜毎自習終り後の一時間を賑はして居ります

(四之助)

第十二回卒業生及有志諸君に告ぐ

今回飯沼要人君は石川縣石川郡役所に於て勤務中の處不幸にも全縣松住町病院に於て永眠さる就いて吾々學窓を同うするもの相計り同君の靈前に聊なりとも香華を供へ哀悼の意を表し度候間右御贊同の上左記御承知被下度候

- 一、香奠料は各自壹圓位
二、出金大正十一年二月十日迄に木曾山林學校内吉川真夫宛御送附相成度
三、芳名及金額は二月號林友に掲載し領收到に換ふ

紀念事業募金領收報告

- 金拾圓 市岡淳一郎殿
金拾圓 蜂須賀忠四郎殿
金貳拾參圓 古畑今朝茂殿
金拾圓 三尾 貫三殿
金拾圓 但馬 廣造殿
金拾圓 種倉 隨藏殿
金拾圓 岡山 益善殿
金拾圓 石曾根四郎殿
金五圓 原 貴一殿
金貳圓五拾錢 新井 榮太殿
金貳圓五拾錢

- 金拾圓 篠原 將英殿
金七圓 伊藤 芳郎殿
金參圓 關谷 靜夫殿
金拾圓 各務 傳六殿
金拾圓 宮崎 光智殿
金五圓 佐々木久一殿
金五圓 武居嘉太郎殿
金拾圓 武居 章殿
金拾圓 上田彌太郎殿
金拾圓 山崎 兵平殿
金拾圓 内田新之助殿
金拾圓 眞 治二殿
金拾圓 和 實也殿
金拾圓 瀧 美雄殿
金拾圓 田中 一殿
金拾圓 上田 鍾二殿
金拾圓 脇田 義正殿
金拾圓 征矢 朴郎殿
金拾圓 岡田彌兵衛殿
金拾圓 内山伊那登殿
金拾圓 宮島 岩見殿
金拾圓 村上 英雄殿
金拾圓 坂田勤太郎殿
金拾圓 都筑武次郎殿
金拾圓 遠藤治一郎殿
金拾圓 南村 末吉殿
金拾圓 樋口 德一殿
金七圓 原 耕民殿
金六圓 富士川金二殿
金五圓 鈴木 靜夫殿

- 金拾圓 村上安太郎殿
金拾圓 岡西 謙三殿
金拾圓 長谷川義雄殿
金拾圓 宮下 信一殿
金五圓 兒野 恭市殿
金五圓 吉村金次郎殿
金拾圓 鷺澤 忠治殿
金拾圓 中島源一郎殿
金拾圓 篠原 忠治殿
金拾圓 米沢保春雄殿
金拾圓 福川 正三殿
金拾圓 丸山 久雄殿
金拾圓 中村 豊治殿
金拾圓 河島 憲一殿
金拾圓 松島周 一殿
金拾圓 野本 與一殿
金拾圓 小藤作四郎殿
金拾圓 志津 篤助殿
金拾圓 原 四郎殿
金拾圓 柳澤正之進殿
金拾圓 星加 晴雄殿
金拾圓 中田 辰雄殿
金拾圓 兒野 榮殿
金拾圓 瀧澤銀次郎殿
金拾圓 原 正次殿
金拾圓 羽田 龍尾殿
金拾圓 前田 正義殿
金拾圓 狩野 深一殿
金拾圓 黒岩 正平殿
金拾圓 柳澤 邦信殿

友 林 蘇 岐

金拾圓 大脇 又術殿
 金拾圓 甲田 林殿
 金四圓 小桂 二郎殿
 金五圓 小林 盛大殿
 金六圓 佐藤 坦殿
 合計金六百五拾壹圓也
 (以下次號)

◎創立貳拾周年記念會

報告

收入之部

金參千七百七拾參圓也 (贖金申込金總額) 四百六十六名分
 但十二月一日現在調

外林產物標本 (價格五拾圓) 內

金千五百拾六圓也 (贖金收入濟金總額) 二百二十一名分
 但十二月一日現在調

支出之部

金七百貳拾七圓貳錢也 記念會支出

岐蘇林友記念會
 號及記念繪葉書發行費
 日給葉書ハ當日出席者在
 校生一同ハ頒

金九拾七圓參拾七錢也 謝恩會費
 金八拾貳圓五錢也 創立記念會準備費並ニ雜費
 金六拾九圓五拾九錢也 記念事業支出

金四拾圓也 記念種子標本代
 金貳拾九圓五拾九錢也 記念運材模型製作費

但材木模型外製作人費共卒業生寄附
 以上二口
 計金七百九拾六圓六拾壹錢也

差引 (但收入千五百拾六圓ニ對シ) 殘金七百拾九圓參拾九錢也
 但十二月一日現在

金六百拾八圓四拾錢也 振替口座名古屋三五五番貯金保管
 金百圓九拾九錢也 出張所預金保管

職員一同記念會寄附
 金四拾圓也 在校生一同記念會寄附

以上 長野縣木曾山林學校
 大正十年十二月一日 創立記念會

追伸
 未だ御申込漏れの御方は御多忙中の儀と御
 推察申候得共何卒本會の趣旨御贊助被下此

林反代領收報告

金貳圓也 上田彌太郎君
 金壹圓也 河島憲一君
 金貳圓也 片桐英雄君
 金貳圓也 潮在實君
 金貳圓也 喜多村明君

編輯部より申上候

今年は今年はとてこの年も亦暮れんと致し候折柄會員諸賢には益々御多祥の御事と奉存候借て例年一月號附録として添附仕候卒業生名簿の儀今回は特に廿周年記念號記載のものゝ以て之に代ふる事と可致候間右御承知被下度候
 猶新年號は紙數増大の計畫中に御座候へ共如何に計畫仕り候とも材料なくては何かも方法無之候間と申す通信隨筆文苑何種と問はず一頁にても半頁にても新年の一日御御愛一月十日迄に當部宛御送附被下度候先は御壯健にて御迎年被遊度祈上保一不二仲 記念號に對し數氏より御寄稿被下候英文印刷の都合上種々奔走仕候へ共遂に上梓し得ず執筆の勞をわまはりし諸氏に申譯も崇之候不惡御了承被下度

大正十年十二月廿五日發行

長野縣四所郡麻郡島町三番地
 編輯部 人安井正夫
 長野縣松本市小柳町全番地
 印刷部 人淺川吉藏

長野縣松本市小柳町全番地
 印刷部 人淺川吉藏

定借金